サラブレッドのしあわせ

宇部道路

【あらすじ】

日本一の馬産地・北海道日高地方にある日高農業高校では、サラブレッドについて学ぶ。

高校二年生になる百瀬川純は、札幌から日高農業高校に転校してくる。転校理由は吃音によるいじめ。馬が好きだという息子を日高に送り出した両親、しかしその思惑は「大学で医学部に入れるため」の目眩し。札幌で有名な百瀬川病院の一人息子として、純は医者になり病院を継ぐことを宿命づけられていた。

伯母夫婦が営む「ホテル海風」に到着した純は、その日の夜中、高校へと連れ出される。足早に駆けていく生徒を追って行き着いたのは厩舎。まさに仔馬が生まれる瞬間に立ち会った純の目からは、一粒の涙がこぼれ落ちる。

個性豊かな同級生たち、元獣医師の担任、優秀な先輩とともに、「みらい」と名付けた仔馬との仲を深めていく純。馬とふれあい、自然で遊び、成長していくなかで、純の吃音症も影をひそめ、すべてが順調かと思われた。

しかし、冬も深まった年の暮れ、みらいの成長に問題が生じる。馬体が大きくならないことは競馬の世界では致命的な欠点だ。走れないサラブレッドに待ち構える未来は、殺処分。残酷な現実を目の当たりにして、純は自らの境遇とみらいの境遇を重ねてしまう。

生徒たちは、みらいに未来を選ばせることにした。競走馬になるか、別の道を探すか。みらいは、競走馬を選び駆け出した。その姿に心を打たれた純は、自身も運命を受け入れ、人の命を救う医者になることを決意する。

とうとうセリに出された、みらい。純とともに挑んだ勝負、最低価格だが無事買い手がついた。これでみらいは競走馬になれる。生徒たちは心から喜び、涙を流す。

一年後。純は競馬場にやってきた。みらいの二歳新馬戦。ファンファーレが鳴る。久しぶりに再会した生徒たちは、祈り、歓声をあげる。みらいの伝説は、生徒たちの未来は、まだ始まったばかりだ。

【登場人物表】

百瀬川純（16／6／18）高校生。
佐々木恵介（16／18）純の同級生。
山川紅葉（16／18）純の同級生。
工藤隆（16／18）純の同級生。
室戸リリ（16／18）純の同級生。
百瀬川匠（40／50）純の父親。
百瀬川莉子（36／46）純の母親。
三波貴子（49）純の伯母。
三波博（50）貴子の旦那。
宮本猛（17）純の先輩。
永野彩（17）純の先輩。
大野太郎（17）純の先輩。
植木宗生（56）純の担任。
横山瞳（43）飼育員。
ホテルの男性客A
ホテルの男性客B
校長先生
騎手
競馬場アナウンス
競馬実況
むかわ駅アナウンス
せり会場アナウンス

○字幕
【競馬とは人生の縮図である
――アーネスト・ヘミングウェイ】

○競馬場・パドック
パドックで嘶く競走馬たち。
隆々たる馬体は神々しくも照り輝き、
馬脚が土埃をあげる。
騎手たちは親身に競走馬を労っている。

○同・客席
アナウンス（声）「札幌競馬場第五レースは、
二歳の新馬戦です。芝一八〇〇メートル。
新馬の輝かしい未来を祝福するかのように、
明るい日差しがコースを照らしています」
必死の形相で馬券を買い求める来場者。
特別席で握手を交わす馬主や牧場主。
陽光に美しく照らされた芝のコースに、
競走馬たちがゆっくりと出てくる。

○字幕
【逆だ　人生が競馬の縮図なのだ
――寺山修司】

○資料映像・二〇〇六年有馬記念
ディープインパクト引退レース。
実況（声）「ディープインパクト先頭、間違い
なく飛んだ。最後の衝撃だ、これが最後の
ディープインパクト」

○資料映像・二〇二〇年秋華賞
デアリングタクト史上初無敗三冠達成。
実況（声）「咲いた咲いた三冠の花！　強く、
逞しく、美しく！　デアリングタクト三冠
達成！」

○字幕
【その栄光を生涯で一度でも掴むのは、
わずか〇・三％のサラブレッド】

○競馬場・客席
熱気溢れる群衆が詰め寄せている。
百瀬川純（18）、客席の入り口に立ち、
ぼんやりとコースを眺めている。

○同・コース
ファンファーレが鳴り響く。
スターティングゲートに向かう競走馬。
実況（声）「未来の名馬は生まれるか。大注目
のレースです」

○同・客席
客席に座り、固唾を飲んで見守る純。
実況（声）「初勝利を目指して二歳の若駒が集
いました。各馬おさまって……」

○同・コース
係員がピストルを鳴らす。
暗転。

○タイトル『サラブレッドのしあわせ』

○日高地方の海岸線
字幕【二年前】
春の陽光に照らされた太平洋、穏やか
に凪いでいる。
その沿岸の道を走る、一台のバス。

○バス車内
閑散としている。
純（16）、リュックサックを抱えて座り、
窓の外、照り輝く太平洋を眺めている。

○新河駅前（夕）
今は使われていない廃駅。
駅前のロータリーにバスがやってくる。
純、リュックサックを背負い、スーツ
ケース片手に降りてくる。大荷物。
三波貴子（49）、純を見つけ手を振り。
貴子「おーい、純くん。こっち、こっち」

純、貴子の姿を見つけて、頭を下げる。

○ホテル海風・外観（夕）
古びた中層ホテル。

○同・ロビー（夕）
入り口で待ちぼうけている純。
ロビーに置かれた机に目がいく。
【サラブレッドのふるさと新河】という手書きの飾りの下に、いくつものパンフレットが置かれている。
純、馬が表紙のものを取り、中を見る。
そこに、貴子が小走りでやってくる。
貴子「ごめん、お待たせ」
純、貴子の声に目をあげて。
純「（小さく首を振る）」
貴子「純くんの部屋は四階」
貴子、手にしていた鍵を純に渡す。
貴子「最上階。大サービスなんだから」
純「あ、あ、あ、ありがとうございます」
貴子「ちょっと階段は大変だけどね（と、含みがあるように微笑んで）。荷物置いておいで。お客さん終わったら、夕飯にしよう」

○同・四階廊下（夕）
窓から心地よい西陽が差し込んでいる。
純、息を切らして階段を登ってくる。
鍵を見ると、四〇一と書かれている。
自室を探しながら、突き当たりの角部屋まで歩き、その扉には四〇一の表札。
純、鍵を回し、ゆっくりと扉を開ける。
そこには、窓ガラス一面の青々と美しいオーシャンビューが広がっていた。

○同・四〇一号室（夕）
ゆっくりと入ってくる純。
景色に見惚れて窓辺に近づいていき、窓を開ける。
心地よい海風が吹き込んでくる。
レースカーテンがふわりと舞い上がる。

ベッドに寝そべり、天井を見上げる純。
遠くから波の音が聞こえる。

○同・ロビー（夜）
純が食堂の様子を伺っていると、出入り口から作業着姿の男たちが出てくる。
男性客Ａ「（食堂に）ご馳走様でした」
男性客Ｂ「（純に）こんちはー」
純「（慌てて）こ、こ、こ」
吃音の症状が出る純、挨拶できないうちに、男たちは立ち去ってしまう。
純「（小声で）こんにちは」
純、肩を落として食堂に入っていく。

○同・食堂（夜）
すでに宿泊客の姿はない。
貴子、テーブルを拭きながら。
貴子「好きなところ座って。今用意するから
（と、厨房へ去っていく）」
純、一番奥のテーブルに座る。
調理服を着た三波博（50）、厨房からやってきて、純の背後から声をかける。
三波「おう、純。元気そうじゃねえか」
純、振り向いて、慌てて立ち上がる。
三波「いい、いい、座ってなって」
純「お。お、お世話に、ななります」
と、頭を下げる。

× ×

食卓に並んだ豪勢な食事。
純、目を丸くしている。
三波「（魚の活き造りを指して）これ、おじさんが釣ったんだぞ。そこの浜で」
貴子「純くんの歓迎会だから特別ね。明日からはお客さんたちと同じメニューだから」
三波「（自慢げに）それも豪華だけどな」
純「（頷く）」
三波「したっけ、純はいつから学校か？」
純「……八日」
三波「明日が四日だろ、（指を折り）四、五、六、七……どっか行きたいところあるか？」

純「……」
貴子「まだわかんないわよ」
三波「そうだ、アザラシはどうだ。アザラシ、見たくねえか？」
純「アザラシ？」
三波「そ、アザラシ」
貴子「はいはいはい、まずは食べましょう。冷めちゃうから」
三波「だな（と笑う）」
純「（顔色を伺うように微笑む）」
純、貴子、三波、手を合わせて、いただきます、と声を揃える。

○同・大浴場（夜）
純、入浴している。
客のいない浴場は静まり返っている。
純「（大きく息を吐く）」
リラックスして表情が和らぐ。
三波（声）「（遠くから）純、純、純」
純、声に反応して脱衣所に目をむける。
浴室のドアが勢いよく開く。
三波、慌てた様子で立っている。
三波「純！」
純「！？」
三波「お前はツイてるぞ」
純「……ツイてる？」
三波「（にやけて）早く上がれ、出かけるぞ」
純「……」

○新河町・道路（夜）
三波の運転するバンが走っている。
ヘッドライトが暗闇を照らす。
助手席に座る純、完全防寒の厚着を着込んでいる。二人の吐息は白い。
純「どこ、いい行くの？」
三波「ひだ農だ」
純「ひ、だ？」
三波「日高農業高校だよ。略して、ひだ農。純の新しい高校じゃねえか」
純「ひだ農」

三波「間に合ってくれるといいんだが」
純「……」
　三波、純が状況を飲み込めていないことを察して。
三波「（笑って）馬だよ、馬」
純「馬？」
三波「純も好きだろう」
純「（頷く）」
三波「いつもはもっと遅い気がするんだがな。去年なんか五月入ってからじゃねえか？まさか始業式より前とは」
　純、スマホを取り出し、画面をつける。
　待ち受けは競走馬。
　まもなく日付が変わろうとしている。
三波「（純のスマホを見て）ライトニングブラウンか？」
純「（三波を見て）博おじさん知ってるの？」
三波「有馬記念に、菊花賞に、日本ダービー。三歳でのＧ１三冠。まさにサラブレッド中のサラブレッドだ」
純「……サラブレッド中のサラブレッド」
三波「好きなのか？」
純「（頷き）は、は、初めて見た競馬だったから。ライトニングブラウンの札幌新馬戦」
三波「あの伝説のレース、生で見たのか！　ラッキーだな、本当に純は馬の子かもしれん」
純「貴子おばさんに連れてってもらって」
三波「（声を出して笑い）貴子の影響か」
純「それで馬、すす好きになったから」
三波「（窓外を顎で示し）ほら着いたぞ。見ろ、ここがひだ農だ」
　純、窓ガラスの外を見る。
　暗闇のなかに校舎が立っている。

○日高農業高校・敷地内の道（夜）
　純、車から降りる。
　遠くで明かりが照らされている。
　校舎から数名の生徒たちが出てきて、明かりの方向へと走っていく。
　三波も車から降りて。

三波「純、行っておいで」
純「博おじさんは？」
三波「（笑って）俺は生徒じゃねえからな」
純、不安そうな表情で歩き始める。

○同・厩舎外（夜）
純、おぼつかない足取りでやってくる。
明かりのついた厩舎。
興奮した馬の嘶きが聞こえる。
周囲では懐中電灯片手に、つなぎ姿の生徒たちが忙しなく動き回っている。
純、走ってきた佐々木恵介(16)と衝突。
佐々木「ごめん」
佐々木、厩舎の中へ走っていく。
純、小柄な佐々木を目で追う。
純「……」
大野「君、どした？」
純、振り返ると、小太りの大野太郎(17)、両手にバケツを持ち立っている。
大野「ひだ農の子か？」
純、すごい勢いで首を縦に振る。
大野「（嬉しそうに）新入生か！」
純、すごい勢いで首を横に振る。
大野「じゃあ、なにさ」
純「ててててて転入生」
大野「転入？」
純「に、に、に、に、に、二年生に」
大野、純の吃音に少し戸惑いながらも、優しく微笑んで。
大野「したっけ、馬、好きか」
純、すごい勢いで首を縦に振る。
大野「よし、こっち来い。大事な瞬間だべさ」
大野、純を引き連れ、厩舎の中。

○同・厩舎内
大野に連れられて入ってくる純。
厩舎には馬房が並び、それぞれに馬がおさめられている。
そのなかの一つの前に、人だかりができている。宮本猛(17)、永野彩(17)、佐々

木、山川紅葉(16)ら生徒たちとともに、
教師と思われる大人の姿もある。
生徒たち、馬房の中を見つめている。
大野「あそこだ」
と、純の前に出て馬房に近づく。
純、恐る恐る大野のあとをついていき、
固唾を飲んで、馬房のなかを覗き込む。
そこでは、一頭の苦しそうな母馬が横
たわり、その腹部から出ている仔馬の
前脚を植木宗生(56)が引っ張っている。
純「……」
植木「よしいいぞ、もう少しだ。頑張れ」
見守る生徒たちからも声が漏れる。
彩「頑張って」
宮本「あと一息」
佐々木「頑張れ！」
紅葉「(静かに手を合わせている)」
純、出産する母馬に目が釘付けになり、
微動だにしない。
純「……頑張れ」
母馬が苦しそうに嘶く。
純「頑張れ！」
生徒たちも声を出している。
植木「出てくるぞ！」
仔馬の顔が腹部から顔を出す。
純「……すごい」
母馬の腹から仔馬が産み落とされる。
佐々木「生まれた！」
純「……！」
生徒たちから歓声が上がる。
植木「頑張ったなあ、偉いぞ、よーしよし」
と、母馬の馬体を優しく撫でている。
生まれたての仔馬は横たわったまま。
植木「お前たち、元気な男の子だ」
母馬、仔馬の身体を舐めている。
生徒たち、二頭の写真を撮っている。
純、幸せそうな表情を浮かべながら、
知らぬまになぜかひと粒涙が溢れる。
植木、純に気が付く、
植木「君が……百瀬川くんか？」

純「（慌てて涙を拭い）は、は、初めまして。
　ももも百瀬川純です」
　と言って、深くお辞儀をする。
植木「二年馬組に転入する子だ」
　生徒たち、純を見る。
　顔を上げる純。
佐々木「同級生の佐々木。よろしく（と笑う）」
純「よ、よろしく」
紅葉「私も（と手をあげ）、山川紅葉」
　純、緊張した様子で手をあげる。
　植木、仔馬のもとにしゃがみ込んで。
植木「お前たち二年生の仔馬だ。ちゃーんと育てるんだぞ。大切に、大切に」
佐々木「（仔馬に）早く大きくなれよ。お前は、すごい血を引いてるんだ」
純「すごい血？」
佐々木「こいつの父親はライトニングスター。あのライトニングブラウンの孫ってことだ」
純「！？」
　純、目を丸くして仔馬を見る。
植木「ひだ農始まって以来のサラブレッドだ」
紅葉「……」
佐々木「速い競走馬になれよ」
　純、興奮している。
宮本「先生、そろそろ」
植木「（頷き）さあ……今度はお前の番だぞ」
　と言って仔馬を触り、立ち上がる。
　立ち上がろうともがき始める仔馬。
大野「（純に）生まれたての仔馬にはなあ、まったく免疫がないんだ。したっけ母ちゃんの乳飲んで免疫つけなきゃいけねんだが、それにはああやって（と仔馬を示して）、一刻も早く自力で立つ必要があるんだべさ」
彩「もう……本当に助けたくなっちゃう」
大野「彩、去年も言ってたぞ、それ」
彩「だって……」
植木「人の手借りちまったら、二度と自力では立ち上がれねえんだ。見てるしかねえ」
佐々木「……自然は残酷だ」
純「……」

そのとき、仔馬が足を震わせながら、
とうとう立ち上がる。
息をのむ生徒たち。
仔馬、生徒たちに顔を向ける。
仔馬と純の目が合う。
純「（仔馬に）よ、よろしく」
仔馬、嬉しそうに低い声で嘶く。
純（N）「僕らのみらいが、駆け出した」

○百瀬川家・リビング
回想（夢）。十年前。
食卓を囲んでいる純（6）、百瀬川匠（40）、
百瀬川莉子（36）。
純、紙を手に朗読をしている。
純「ゆ、夢。ぼ、ぼぼくは、大きくなったら、
お父さんみたいな、おおお医者さんになり
ます。病気の人を治すのが、かかかっこい
いからです」
匠と莉子、目を見合わせて。
匠「（微笑み）偉いぞ、純。お医者さんになっ
たら、お父さんの病院継いでくれるか？」
純「うん！」
莉子「純は優秀だからなれるよねお医者さん」
純「そうだよ！」
匠「……あのな純、今みたいに読み上げにく
いときとか、喋りにくいときは、ゆっくり
話しなさい。お医者さんになりたいんだろ」
莉子「（諌めるように）お父さん」
匠「（莉子に）治らなかったら困るだろう」
純「（不思議そうな顔で）……」
匠「（純を見て）純はサラブレッドなんだから」

○ホテル海風・四〇一号室（朝）
目を覚ます純。
純「……」
身体を起こして窓を見る。
そこには、自由に空を飛ぶ海鳥の姿が。

○日高農業高校・体育館
始業式。

三十名ほどの生徒たちが規則正しく整列し、壇上では校長が話している。
校長「……先日、我が校にまた新しい生命が生まれました。誕生時の体重はおよそ四五〇〇グラムと、サラブレッドとしてはやや小ぶりですが、これから馬組の皆さんと一緒に成長していくことでしょう」
純、生徒たちのなかに、佐々木、紅葉、宮本、大野、彩の姿を見つける。

〇同・二年馬組教室
十名ほどの生徒で賑わう教室内。
植木と純、教室前方へ入ってくる。
植木「座れー」
生徒たち、わらわらと席につく。
植木「（純に）自己紹介」
生徒たちの注目が純に集まる。
純「（一礼して）も、もも、もも、百瀬川、じゅじゅじゅ純です。ささささ札幌から来ました。……ああああまりうまく話せません。でも、ううう馬がすすす好きです」
静まり返る生徒たち。
工藤隆（16）、手を挙げて。
純の表情に緊張が走る。
工藤「自分、好きな馬おるん？」
純「（拍子抜け）……ライトニングブラウン」
工藤「ほんまか！　俺も好きや！」
紅葉「あの美しい黒鹿毛」
佐々木「なに派？　有馬記念？　菊花賞？」
純「（嬉しそうに遮って）二歳新馬戦！」
工藤「圧勝のデビュー戦か！」
純「（楽しさ勢い余って）完璧なスタートダッシュですさすがに飛ばしすぎかと思ったのに、最終コーナーまわってさらに加速して、最後は十三馬身差だよ、すごすぎる」
吃音など微塵も感じさせないほど楽しげに勢いよく話す純の姿を、生徒たちは優しく見守っている。
佐々木「たしかにあれは圧倒的だった」
工藤「俺は四歳、阪神大賞典や」

純「あ！……僕も好き。最後の追い上げ」
工藤「純ちゃん、気が合うなあ」
純、嬉しそうに微笑んでいる。
佐々木「ところで、なに志望なの？」
純「（驚いて）な、な、ななに志望？」
工藤「ジョッキーになりたいとか、調教師とか、夢はでっかく馬主とか、あるやろ」
紅葉「工藤くん、競馬以外の仕事もあるのよ」
佐々木「うん、純はなにになりたいの？」
純「……なにになりたい……」
答えあぐねる純。
教室は静まり返る。
植木「（純の様子を見て）ま、おいおいだな。あそこ、恵介の隣に座れ」
と、空席を指す。
純「……」

○同・食堂
純、佐々木、工藤、三人でテーブルに座り、三人ともカレーを食べている。
純、カレーを頬張り、目を見開いて。
純「美味しい……」
工藤「せやろ。日高の食材は最高や」
佐々木「久しぶりに食うと美味いな」
工藤「いや、いつ食うてもうまいねん。ほな恵介、いつもなに頼んどるん？」
佐々木「いろいろ」
工藤「いろいろて、けったいやな」
佐々木「……俺ら騎手志望は身長伸びすぎてもいけないし、体重増えすぎてもいけない。わかる？　食事もバランス重視なの」
工藤「ほんま偉いこっちゃ」
佐々木「宮本さん（と、スプーンで宮本を指し）。今日もサラダと鶏料理」
工藤「宮本はんは別格やな」
佐々木「卒業後は競馬学校確定だって聞くし。工藤、競馬ファンならマジでサインもらっておいて損ないぞ……」
佐々木と工藤、二人の会話についていけず、ぽかんとしている純に気がつく。

佐々木「ごめんごめん」
工藤「そういえば、自己紹介もまだちゃうか」
純「（頷く）」
工藤「工藤や、工藤隆。思うてるまんま大阪出身。競馬が好きで好きでかなわんくて、ここまで来てしもた」
佐々木「佐々木恵介。純と同じ札幌から」
工藤「恵介は騎手目指してんねん」
佐々木「勝手に他己紹介するな」
工藤「タコは紹介してまへん」
佐々木「純の苗字、百瀬川だったよね」
純「（頷く）」
佐々木「もしかしてだけどさ……実家、病院？」
工藤「ほんまか！」
純「そう……だけど」
佐々木「（合点がいったように）やっぱりかあ。珍しい苗字だから、もしかしてと思って」
工藤「なんや今、自分ら地元ークしてる？」
佐々木「百瀬川病院って、札幌駅前にある病院でさ。ホームからもよく見えるから結構有名で……（純に）だよね？」
純「（苦笑いして）ゆ有名かは……わわわからないけど」
工藤「（笑って）恵介も勝手に他己紹介してるやないかい」
佐々木「あ、たしかに」
工藤「そない有名な病院の子供が、なして田舎の農業高校にきたんや？」
工藤、何気ない様子で純に聞く。
純「それは……ううう馬が好きだから」
工藤「なんやその理由、ええやんけ」
佐々木「ご両親寛大だね。許してくれたんだ」
純「……」
工藤「ええなあ。俺も医者の息子やったら、絶対大穴狙いの競馬でひと山あてたるのに」
佐々木「工藤……まさかお前、もう賭けてるんじゃないよな？」
工藤「（慌てて）賭けてない、賭けてない。見てるだけに決まってるじゃないですか、兄貴。今後の話。コンゴ共和国の話ですやん」

佐々木「ふーん」
工藤「純からもなんか言うたってくれ」
純「……（誤魔化すように口角を上げる）」
工藤「なんやそれえ」
佐々木、声を出して笑う。

○同・厩舎内
馬房では仔馬が母馬の乳を飲んでいる。
それを見守る二年馬組の生徒たち。
紅葉「飲んでる飲んでる」
佐々木「大きくなった気がするな」
工藤「ええなあ、お前たち出産見たんやろ」
紅葉「純くんもいたよ」
工藤「（驚いて）純ちゃんも？　なんでや！」
純「（笑って）……」
佐々木「それだけ馬が好きってことじゃん」
工藤「俺だって好きや」
佐々木「工藤が好きなのは馬じゃなくて競馬」
工藤「ちゃうわ」
純、やりとりを笑って聞いている。
厩舎の出入り口に一人で立つ女子生徒、
背が高く長髪の室戸リリ（16）。
純、リリの姿に気がつく。
リリ、純の視線に気づいて姿を消す。

○同・放牧地
植木、母馬に引き綱をつけ左手に持ち、
右手は仔馬の肩に回している。
生徒たち、植木の周囲に集まっている。
植木「これからこの子を育てていくわけだが、
さしずめのゴールはどこかわかるか？」
工藤「決まっとる。競馬で勝つことや」
植木「（首を横に振り）気が早い。その手前」
佐々木「セリで買ってもらう」
植木「そう。この子はまだただの馬だ。サラブレッドの本願たる競走馬になるには、買い手がついて、育成牧場で訓練を受け、レースに出る必要がある。この学校でやってやれることは、この子をちゃんと売ること。欲を言えば、高値でな（と笑う）」

仔馬、植木に馬体をすり寄わせている。
佐々木「いくらくらいで売れるんですか？」
植木「ひだ農の最高額は二千万」
生徒たち「二千万！」
純「……すごい」
植木「その決め手となるのが、今から教える引き馬だから。よく見てなさい」
純「引き馬……」
植木「リリ、手伝って」
リリ、前に出て仔馬の後ろに立つ。
植木「生後二か月くらいまでは、こうやって（と、仔馬の頸に手を回し）手を使って仔馬を支える。（母馬を繋いだ引き綱を見せて）引き綱を使うのは生後三か月くらいからだ」
紅葉「どうして最初は手を使うんですか？」
植木「一つには、仔馬の頸はまだすわってないから傷つけないように。もう一つは、いわゆる馴致といってな。この時期にどれくらい人間と触れ合い慣れたかっていうのが、意外と競馬にも効いてくる。愛された馬ほど速く走る、人間と一緒だな」
生徒たちから笑いが溢れる。
工藤「え、なんか今いいこと言った感じ？」
純「……」
植木「まず歩くぞっていう合図を出してやる。同時にもう一人が、尻を少し押してやる」
植木が仔馬の右肩をポンポンと叩き、リリが尻を軽く押す。
すると仔馬はゆっくりと歩き出す。
生徒たち、声をあげて感心する。
植木「（歩きながら）大切なのは、仔馬のペースで歩かせること。でも、立ち止まらせない。止まりそうになったら、こうやって（と、仔馬の右肩を叩き）合図をするか、リリ」
リリ、仔馬の尻を優しく撫でる。
植木「後ろの補佐役が優しく尻を撫でてやる」
工藤「さすがリリや」
紅葉「手慣れてるよね」
× × ×
青々とした空のもと、緑色の放牧地を、

馬と人間が悠々と歩く。
×　×　×
植木、母馬と仔馬を従えている。
生徒たち、その周りに集まっている。
植木「仔馬にとっては運動にもなるし、毎日歩かせることで、怪我や異常にも早く気がつける。競走馬にとって脚は命だ。絶対に不調を見落とすな」
紅葉「（手を挙げて）先生」
植木「なんだ、紅葉」
紅葉「怪我した馬はどうなるんですか？」
植木「……（生徒たちを見回して）殺処分だ」
生徒たち、驚いて息を呑む。
純「……」
植木「サラブレッドは走るために生まれる。走れないサラブレッドは生きられない」
紅葉「そんな」
植木「残酷だと思うか？」
生徒たち、反応できない。
植木「でもそれが現実だ。売れなかった競走馬も大半は処分される。（仔馬をさすって）この子を生かすも殺すもお前ら次第。お前たちは……命を預かってるんだからな」
ちょうどそのとき、母馬が高く嘶いた。

○新河町・道（夕）
夕焼けが田舎の風景を赤く染める。
純、自転車を漕いでいる。

○ホテル海風・ロビー（夕）
帰ってくる純。
受付に立つ貴子、純に気がついて。
貴子「おかえり。これ、届いてたよ」
と言って、封筒を掲げる。
純「……」
貴子「お母さんから。読んであげて」

○同・屋上（夕）
太平洋と日高地方の風景を一望できるテラス。少し古いプラスチックの机と

椅子が数セット置かれている。
純、海風に吹かれながら、椅子に座り、
貴子から手渡された封筒を開き、読む。
莉子（声）「純へ。お元気ですか。日高での生活は楽しいですか。お友達はできたでしょうか。困ったことがあれば、いつでも言ってくださいね。いつでも帰ってきてくださいね。お父さんも、お母さんも、病院のみんなも、待っています」
純、苦い顔で立ち上がり、テラスを囲む手すりへと近づきもたれかかる。
手紙を折って紙飛行機を作る純。
純「……病院、病院、病院、病院……」
純、紙飛行機を空に向かって投げる。
飛んでいく紙飛行機を眺めながら。
純「サラブレッドは走るために生まれる、か」

○百瀬川家・外観（夜）
回想。この年の二月。
降りしきる雪。大きな一軒家。

○同・純の部屋（夜）
電気は消されていて暗い。
窓の外を眺めている純。
街灯に照らされる表情は放心している。
部屋の外から言い争う声が聞こえる。
匠（声）「どういうことだ。また休んでるって」
純、びくりと驚き、目だけを動かして
ドアのほうを見る。
莉子（声）「（小声で）純に聞こえますよ」
匠（声）「少しは聞かせたほうがいいんだよ。
母さんがいつまでも甘やかすからだろう、
何回も何回も不登校みたいなことになって」
純「……（唇をきつく結ぶ）」

○同・リビング（夜）
匠（50）と莉子（46）、食卓に座っている。
匠、夕食をとっている。
莉子「いじめ、続いてるらしいの」
匠「（ため息をついて）……またか」

莉子「またか、って……あの子は悪くないじゃない」
匠「言い返せばいいのにすぐ黙るから、純は」
莉子「言い返したくても言い返せないのよ。わかるでしょう」
匠「でも吃音だからって、いつまでも守ってもらえるわけじゃないだろう。いつかは自分でなんとかしないといけない日が来るんだから。それに……医者の仕事なんて大半は患者との会話だぞ、どうすんだ」
莉子「またすぐそれ。あなたは結局、純に病院を継いでもらいたいだけじゃない」
匠「だけってことはないけどさ……現実問題、跡継いでもらわないと困るだろ、一人息子だぞ。病院潰れて困るのはこの家族だけじゃない、地域医療の問題なんだから」
莉子「そうだけど……」
匠「医者の子は、医者になる。純には悪いけど、これは運命だと思うよ。幸せなことなんだけどな、本当は。なりたくてもなれない人も多いんだから」

○同・純の部屋（夜）
純、膝を強く抱えている。
純「……勝手に運命とか幸せとか決めるな」

○同・リビング（夜）
匠「（ため息をついて）高校、変えるか？」
莉子「え？」

○同・純の部屋（夜）
純「え？」
純、驚いてドアの方を見る。

○同・リビング（夜）
匠「高校中退でもされたら困るからな」
莉子「それなら」
と言って立ち上がり、本棚から日高農業高校のパンフレットを持ってくる。
匠、パンフレットを手に取る。

匠「日高農業高校」
莉子「純が置き忘れたんだと思うけど。なにかのアピールかもしれないって」

○同・純の部屋（夜）
純、立ってドアに耳をつけている。
莉子（声）「日本でも数少ない、サラブレッドの飼育を学べる学校みたいなの。あの子、馬好きじゃない？」

○同・リビング（夜）
匠「農業高校か……いいかもしれないな。体力はつくだろうし、忍耐も鍛えられそうだ」
莉子「でしょう。貴子姉さんのホテルも近いし、泊めてもらえるんじゃないかと思って」
匠「うん」
莉子「いいかしら？」
匠「いいよ」

○同・純の部屋（夜）
純、音を立てずに大喜びしている。
匠（声）「……ただ二年だけだぞ」
純、動きを止める。
匠（声）「大学は医学部に行かせる。いいな？」
純「……」
回想終わり。

○日高農業高校・放牧地
純、母馬と仔馬を従えて立っている。
その前には植木、後ろにはリリ。
植木「よし。じゃあ歩いてみよう」
純「はい」
と言って、深呼吸をする。
初夏の風が吹く。
純、仔馬の右肩を叩く。
同時に、リリが仔馬の尻を撫でる。
歩き出す仔馬、母馬も後に続く。
純、二頭を制御するのは難しく、歩くたび汗が吹き出し、顔が引き攣る。
植木「馬を信じろ。馬に信じてもらえ」

純「よーしよし。いち、に。いち、に。偉いぞ。もうちょっと、もうちょっと」
純、次第に呼吸が落ち着いてくる。
仔馬の目を見据える。
周囲の音が静かになっていく。
リリ、純の姿を後ろから見つめている。
× ×
牧草を食べている母馬と仔馬。
純とリリ、座ってその様子を見ている。
リリ「気持ちよさそう」
純「うん」
リリ「引き馬、上手くなってきたね」
純「……ありがとう」
リリ「(夏風が吹いて) もうすぐ夏だねえ」
純「うん」
リリ「そろそろ仔馬にも引き綱をつけなきゃ」
純「室戸さんはどうしてそんなに詳しいの？」
リリ「(純のほうを見て)どうしてだと思う？」
純「……馬が好きだから？」
リリ「(笑って) 好きだからかあ」
純「ご、ごめん」
リリ「そうだったらいいんだけどね」
母馬と仔馬、少し走る。
リリ「あ、走った」
純「……」
リリ「ねえ知ってる？ 競走馬が自由に走れるのって、この子供の時期だけなんだ」
純「どういうこと？」
リリ「セリで売れたら最後、あとは勝つため、人間に金を稼がせるためだけに走る。だからああやって自由に走れるのは、今だけ」
純「引退後は？」
リリ「……引退後も生きていられる馬なんて、ほんのひと握りなんだから」
純「(複雑な表情で)そうなんだ……なんか……最近よく恥ずかしくなる、自分のことが」
リリ「なんで？」
純「馬が好きだとか言っちゃってさ、全然なにもわかってないから。馬の辛さとか苦しさとか悲しさとか、全然想像もできてない」

リリ「（純を見て）……さっきの答え。私の家、ここ日高では有名な牧場なんだ。あの子のおじいちゃんもうちで生まれた」
純「おじい……ライトニングブラウンも？」
リリ「そうだった。あんた、ライトニングブラウン好きだって言ってたね」
純、スマホを取り出して、待受画面のライトニングブラウンを見せる。
リリ「は？　待ち受けにまでしてんの？」
純「うん」
リリ「（怪訝そうな目で）……」
純「……あれ、もしかして引いてる？」
リリ「激しく引いてる」
純「……（笑う）」
リリ「……（笑う）」
どちらからともなく笑い始める二人。
次第にその笑い声は小さくなっていく。
リリ「兄弟いなくてさ……だから、私の未来はもう決まってんだ。牧場継いで、牧場主になる。知ってる？　牧場の仕事って辛いんだぜ。朝早いし、長期休みないし旅行行けないし、汚い臭いなんて当たり前。（草むらに寝っ転がって）やってらんないよ」
純「……じゃあ、僕と一緒だ」
リリ「は？」
純「いや、一緒じゃないかもだけど。だいたい似てるっていうか。あ、いや違うか……」
リリ「（笑って）言ってみなよ」
純「……うち、札幌で病院やっててさ」
リリ「知ってる。（いやらしく）お坊ちゃん」
純「やめてよ」
リリ「ま、私もお嬢様ですけど」
純「……ここ卒業したら、医学部入って医者になって、病院継ぐってことになってる。だから、僕の未来も決まってる」
リリ「……医者はいいじゃん」
純「知ってる？　医者の仕事って辛いんだよ。朝早くて夜遅いし、長期休みないし旅行行けないし、人も意外と汚いし臭いからね。（草むらに寝転び）やってらんないよ」

純とリリ、おかしくなって笑い出す。
リリ「（笑いながら）なに、純はじゃあ牧場主のほうがいいわけ？」
純「室戸さんは医者のほうがいいわけ？」
二人とも笑いが止まらない。
しばらく笑ったあと、余韻を感じて。
リリ「未来ね……」
純「未来か……ねえ、どうしてだと思う？」
リリ「なにが？」
純「ここにいると、あんまり吃音がでない」
リリ「いいこと？」
純「いいこと」
リリ「ならよかった。どうしてかは知らない」
純「（笑って）そうだね」
リリ「理由って重要じゃないことも多いよね」
植木、二人に近づいてくる。
植木「なんだ二人、仲良く寝転がって」
純とリリ、慌てて起き上がる。
植木「（仔馬を見ながら）そろそろ名前つけなきゃいけないな。あいつも」

○同・二年馬組教室（日替わり）
教壇に立つ植木。
二年馬組の生徒たちが席についている。
植木「一人一つだからな。よく考えろ」
純、手元の紙に目を落とす。
そこには【みらい】と書いてある。
× × ×
黒板に【しゅん】【らぶ】などの名前案が並ぶなか、【みらい】も書かれている。
紅葉、箱から投票用紙を取り出して。
紅葉「みらい」
と読み上げる。
隣に立つ佐々木、黒板に正の字を書く。
紅葉「みらい、みらい、みらい、みらい……」
生徒たちから歓声が上がる。
植木「なんだ満場一致か……誰の案だ？」
生徒たち、周囲をキョロキョロと見る。
純、ゆっくりと手をあげる。
佐々木、工藤、紅葉、リリ、みな嬉し

そうに笑顔を浮かべる。
植木「まさに、お前たちのみらいだな」
佐々木と工藤、純に駆け寄り、胴上げを始める。
純「(楽しそうに)ちょっとちょっとちょっと」
工藤「みらい！」
佐々木「みらい！」
紅葉やリリら女子生徒、微笑ましそうにその様子を眺めている。
リリ「バカだなあ、ほんと」

○同・放牧地（日替わり）
夏休み。雲ひとつない青空、緑に囲まれ、みらいと戯れる生徒たち。
純、かつていじめられていたことが嘘のように満面の笑顔を浮かべている。
純「みらい、こっち！」
純が呼ぶと、みらいも嬉しそうに走る。

○新河町・乗馬クラブ（日替わり）
純、佐々木、工藤、紅葉、リリは、町内の乗馬クラブにやってきている。
慣れない手つきでヘルメットを被る純。
工藤「なんや自分、乗馬初めてなんか？」
純「うん。札幌にはできるところなくて」
リリ「(不敵に笑い)それで本当に馬好きい？」
純「うるさいなあ」
佐々木「まあ見てなって」
と言って、颯爽と馬にまたがる。
小柄な佐々木の乗馬姿はカッコよく、まさに騎手の風格さえある。
工藤「恵介はほんまに騎手なれるで」
紅葉「私だって」
と言って、慣れた様子で馬にまたがる。
工藤「あら。紅葉ちゃんも？」
紅葉「小さい頃から乗ってるから」
工藤「謎な人多すぎるで、ここ」
× × ×
馬に跨っている純、佐々木、工藤、紅葉、リリ。

佐々木「いいか。重心をまっすぐ、姿勢を正して。頭、肩、お尻、かかとは一直線」
純、見よう見まねで姿勢を正す。
佐々木「あとは引き馬と同じ、コミュニケーション。馬さん歩いてね、と足でさすってあげると……（と、足でお腹をさする）」
佐々木の乗る馬がゆっくり歩き始める。
佐々木「右に曲がりましょう、と重心を傾けると……（と、重心を傾ける）」
佐々木の乗る馬がゆっくり右に曲がる。
純「いやいや絶対難しいって」
工藤「純ならきっと簡単や」
リリ「いつもみらいと息ピッタリじゃん」
紅葉「できるできる」
純「……よし（と姿勢を正して）……」
緊張の面持ちで、佐々木の言うとおり、馬の腹部を足でさすり。
純「歩こう」
すると、純の馬もゆっくり歩き出す。
純「（興奮して）乗れてる？　乗れてる？」
佐々木「乗れてる、乗れてる。いいぞ！」
リリ「すごいすごい」
林道を馬に乗って歩く純、佐々木、工藤、紅葉、リリ。自然と笑顔が溢れる。

〇日高農業高校・校門前（朝）
日が昇る前。暁闇が辺りを包む。
自転車にまたがる、佐々木と純。
佐々木、スマホを取り出し時間を見る。
時刻は朝四時を少し過ぎたばかり。
工藤「（大声で）すまーん」
と言いながら、自転車でやってくる。
純「遅い」
佐々木「遅すぎる」
工藤「（息が上がっている）」
佐々木「じゃあ行こうか」
工藤「ちょっと……休ませてくれや」
純と佐々木、目を合わせてニヤついて、同時に全速力で自転車を漕ぎ始める。
工藤「鬼や！」

純「レース、始まっちゃうから！」
佐々木「工藤の大好きな競馬だぞ！」
工藤「……ああ！（と唸り声をあげて）」
工藤、全力で自転車を漕ぎ始める。

○日高地方の海岸線（朝）
左手に広がる海岸線から朝日が昇ろうとしている。絶景である。
懸命に自転車を漕ぐ、純たち三人。

○むかわ駅・駅前（朝）
日高本線の終点。人通りは少ない。
純、佐々木、工藤、自転車で乗り付け、大慌てで駐輪場に自転車を停める。
アナウンス（声）「当駅始発苫小牧行き普通列車、まもなく出発します」
佐々木「やばいやばい」
工藤「先行ってるで」
佐々木と純、自転車を止めて駅構内へと走っていく。
純「ちょっと待って！　ちょっと！」
と言って、少し遅れて純も駅へと走る。

○同・ホーム
一両編成の電車が止まっている。
すでに電車内にいる佐々木と工藤、ドアの前に立ち、純を待ち構えている。
発車を告げるブザーが鳴る。
純、ホームへと走り込んでくる。
佐々木「（手招きして）早く、早く」
工藤「純、飛ぶんや！」
純、間一髪で飛び乗る。動き出す電車。
純、息が乱れ、心臓を抑えている。
誰からともなく、三人は笑い始める。
工藤「もうあかんかと思ったわ」
佐々木「これ逃したら三時間後だからね」
純「（息を整えながら）全部……工藤のせいだからな。なにか奢れよ」
工藤「馬券こうたる」
純「（笑って）それはダメ」

佐々木「アウト」
工藤「ケチやなあ」

○日高本線・車内
椅子に並んで座り、肩を寄せ合って眠る、純と佐々木と工藤。

○函館競馬場・入り口
大勢の人で賑わっている。
入り口の前、人混みにまみれ競馬場の熱気を肌で感じている純たち三人。
工藤「行こか」
佐々木「行こう」
純「行こう」
会場内に歩いていく。

○同・馬券売り場
顔を突き合わせてレース表を見る三人。
佐々木「ひだ農の馬、何レースだっけ」
工藤「マウンテンボルトやろ……三歳未勝利やから……あった（と、４Ｒを指さす）」
純「ほんとだ。芝一八〇〇メートル」
レース表、マウンテンボルトの名前。
佐々木「三歳未勝利ってどうなの？」
工藤「珍しくはないけど、そろそろ勝ちたいやろな。新馬戦から始まって、勝てないうちは未勝利、勝てば一勝、二勝、三勝クラスとのしあがって、そこからが競馬の花形オープン戦や。なかでもＧ１クラスなんてお前、ごっついでえ。競走馬の夢の舞台や」
純「勝てると思う？」
工藤「現実を言えば、ほとんどの馬が未勝利のまま終わってまう。でもな、競馬は現実とちゃう、夢や」
純「……夢」
工藤「俺はマウンテンボルト、ひだ農サラブレッドの底力信じるでえ。ほな、おふたりさん、先行っといて」
と言って、立ち去ろうとする。
佐々木「工藤、くん（と、呼び止める）」

工藤、恐る恐る振り返る。
佐々木、場内に掲示された【未成年　馬券購入禁止】の張り紙を指さす。
工藤「ちゃうちゃう、トイレやトイレ」
純と佐々木、訝しむ目線で見つめる。
工藤「あれれ……なんやおさまったな。ほな、行こ行こ。さ、はよ」
三人は客席へと向かう。

○同・客席
並んで座る、純と佐々木と工藤。
佐々木、双眼鏡を目にあて見ている。
佐々木「いた、いた。マウンテンボルト」
純「どこ？」
佐々木、双眼鏡を純に渡す。
佐々木「五番。赤い帽子の鳥塚ジョッキー」
純「よくわかるね」
佐々木「騎手の名前は全員覚えてるよ」
工藤「あほこけ。レース表見たんやろ」
佐々木「……」
純「（双眼鏡を外して）そうなの？」
佐々木、照れる。
純、双眼鏡を工藤に渡しながら。
純「でもいつか恵介も乗るんだもんなあ」
佐々木「……おう」
工藤「（双眼鏡を覗きながら）恵介には、仰山勝たせてもらうから、期待しとるで」
佐々木「気が早ええよ」
純「工藤はなんでそんな競馬一筋なんだ？」
工藤「親父の影響や。依存症でな、（指で豆粒サイズを表して）こんなに小さいときから競馬場連れまわされとった。（笑って）結局負け越したまま死んだ馬鹿やけどな、コテコテの大阪弁と競馬愛だけは残してくれた」
純「……」
佐々木「……」
工藤「ちゃうちゃう、湿っぽい話やあらへん、笑い話や。俺は親父みたいにはならへん、絶対万馬券当てまくったるっちゅう話や」
佐々木「（笑って）工藤は勝たせてやるよ」

工藤「頼むで、ほんまに恵介」
佐々木「本当に……騎手になれたらね……」
静かになる三人。
工藤「なにぬかす。当たり前やろ」
純「そうだよ」
佐々木「いや……やっぱり実際に騎手の人たちをこうしてみると、小さいなあと思って」
工藤「自分も小さいやんけ」
純、佐々木の表情の変化を読み取ろうと、真剣に見据える。
佐々木「（微笑んで）……せやな」
工藤「あ、エセ関西弁」
純「（安心したように）レース始まるでえ」
工藤「ちょ、純まで、やめえや」
佐々木「よっしゃ、いてまえ！」
純「いてまえ！　いてまえ！」
工藤、目を丸くして二人のことを見る。
出走を知らせる空砲が鳴る。

○大野家・庭（夜）
三年生の大野、宮本、彩、二年生の純、佐々木、工藤、紅葉、リリ、楽しそうに花火をしている。
×　×　×
花火も終わり、すいかを食べる八人。
夏の虫が鳴いている。
佐々木「いよいよですね。先輩たちのセリ」
大野「（頬張りながら）だな」
リリ「誰が引くんですか？」
彩「猛」
宮本、控えめに手を挙げている。
彩「……と私（と、手をあげる）」
純「引き馬ですか？」
大野「セリで一番重要な役割だ。仔馬が売れるかどうか、そしていくらで売れるかは、引き馬にかかってるからな」
彩「もう……プレッシャーかけないでよ」
大野「事実だもん」

○セリ会場・広場

出品される馬と生産者、そして購入を希望する参加者が散らばっている。
大野（声）「ひだ農生産馬が参加するのはサマーセール。およそ千頭もの一歳馬が出品される国内最大規模のサラブレッドのセリだ」
純（声）「千頭！？」
彩（声）「よっぽど血統が良くないかぎりは、セリの結果も当日次第」
宮本（声）「なんとか目立つ必要がある」
広場の中央、円形のコースが用意されていて、そこで引き馬が行われている。
大野（声）「そこで、最初のアピールタイムが、本番直前の引き馬。今年は猛の担当だ」
猛、真剣な表情で引き馬を行っている。
大野（声）「多くの買い手はここで馬の様子を見て、セリに参加するかどうかを決める」
彩（声）「いっちばん大事な役割かもだよね」
猛（声）「彩……」
大野（声）「引き手の言うことを聞いているか、正確に歩けているか、そして体格や筋肉に問題はないか。猛、頼んだぞ、本当に」
猛、無事引き馬を終え、安堵の表情で仔馬の頭を撫でる。

〇セリ会場・メイン施設
建物内、すり鉢状になった会場の真ん中に土が敷かれ馬が立っている。
迫り上がる客席には多くの買い手が詰めかけ、金額がコールされるたびに、手を挙げて購入意思を示している。
大野（声）「そして本番。メイン会場では、たくさんの参加者の前で、馬を静止させる」
とある馬、突然暴れ始めてしまう。
猛（声）「暴れでもしたら大変だ。人の言うことを聞かない馬という最低の評価が下る。競馬と同じ衆人環視の中、どれだけ落ち着いていられるか。圧倒的に大事な役割だな」
暴れた馬、そのまま退場させられる。
彩（声）「猛め……」
彩、仔馬を従えて会場へと入ってくる。

大野（声）「人と馬の信頼関係が最も試される。
二人だけのスタジアム、晴れ舞台だ」
アナウンス「今年も日高農業高校の生産馬が
やってきました。三百万円からです」

○日高農業高校・二年馬組教室
教室前方にモニターが置かれ、サマー
セールの生中継が映し出されている。
その様子に釘付けになる生徒たち。
アナウンス（声）「三百万、三百万、三百万」
客「はい！」
アナウンス（声）「ファーストビットです」
生徒たちから歓声が上がる。
佐々木「よし！」
工藤「売れるんは確定や！」
アナウンス（声）「三五〇万～、三五〇万！　四
百万～、四百万！」
彩、しっかりと仔馬を静止させている。
純「彩先輩、すごい。微動だにしない」
アナウンス（声）「六百！」
買い手（声）「はい！」
アナウンス（声）「七百！」
買い手（声）「えい！」
生徒たち、固唾を飲んで見守る。
紅葉、祈るように手を合わせている。
アナウンス（声）「八百万、八百万、もう一声
いかがですか。なければ正面の方にハンマ
ーが落ちます。八百万、八百万、八百万。
それでは正面の方、七五〇万でお買い上げ」
ハンマーの音が高々と鳴り響く。
生徒たち、喜びを爆発させる。
モニターのなか、安堵する彩は仔馬と
ともに会場を後にする。
純、放心したようにモニターを見つめ、
まだ喜ぶことができない。
純「……すごい……なんだ、この世界は」
後ろから工藤が飛びかかり。
工藤「来年は俺たちやで！」
純「え？　ああ」
と言って、取り繕うように喜ぶ。

佐々木「みらいもちゃんと売らなきゃな」
と言って、純の肩に手を置く。
植木「(笑って)みらいはいくらになるかなあ」
喜ぶ生徒たちを横目に、一人教室を出る紅葉。
純、その姿に気がつく。

○同・校舎前（夕）
自転車を押している純と、自転車に跨っている佐々木と工藤。
純「ちょっと厩舎寄ってから帰るわ」
工藤「ほうか」
佐々木「また明日な」
純「うん、また」
純、自転車を押して厩舎に向かう。

○同・厩舎（夕）
純が近づくと、紅葉が一人、馬房の外からみらいを眺めていることに気づく。
純「(恐る恐る)来てたんだ」
紅葉「(気がついて)ああ、純くん」
純、紅葉に近づく。
紅葉「見て、よく眠ってる」
紅葉の視線の先で横たわるみらい、気持ちよさそうに寝ている。
純「本当だ」
紅葉、一点を見つめるように、突然と。
紅葉「私、小さい頃から家族によく乗馬連れてってもらってさ、めちゃくちゃかわいいじゃん、この子たち。夢中になって。馬に関わる仕事したいなあって、この学校入ったんだよね」
純「そうだったんだ」
紅葉「なのにさ……こんなにかわいい子が、やれ何百万だ何千万だって、モノのように売り買いされちゃうんだもんねえ。なんか知りたくなかったっていうか。でも、知らなきゃいけなかったっていうか」
純「……」
純、紅葉の表情を見る。

紅葉「私たちってさ、命を育ててるのかな。商品を作ってるのかな」
純「……」
紅葉「純くんはどっちだと思う？」
純「それは……その」
紅葉「ま、私にもわかんないけど」
純「……」
紅葉「できるだけ高値で買ってもらったほうがこの子も幸せな気はする。でも……もし自分がセリにかけられたらと思うと、金額とか以前に不幸せな気もする」
純「うん……僕もときどき考える。サラブレッドって、本当は走るの好きなのかなって」
紅葉「……たしかに」
純「競走馬としてレースに勝つことが幸せな気もするけど、そもそも人に走らされてることを思うと不幸せな気もする……なんなんだろうね……サラブレッドの幸せって」
紅葉「（みらいに）お前の幸せって、なんなんだよお」

○同・保健室（日替わり）
健康診断を受診する生徒たち。
純（N）「夏は終わり、新学期が始まった」
視力をはかる純。
レントゲンをとる工藤。
身長と体重をはかる佐々木、結果を見て、絶望の表情を浮かべている。

○同・二年馬組教室（日替わり）
数学の授業を受ける生徒たち。
純（N）「気づけば高校生活も折り返し。いつの間にか僕たちは、自分たちが思うよりずっと、大人に近づいていたのかもしれない」
純と紅葉、真面目に板書している。
リリは居眠りをし、工藤は隠れてパンを食べている。
思い詰めたように外を眺める佐々木。

○同・厩舎（日替わり）
引き馬が終わり、みらいにつけていた馬具を取り外す純。

○同・用具室
引き綱や無口、鞍やヘルメットなど、小さな部屋に所狭しと置かれている。
純、入ってくる。
手にした馬具を棚に戻す純、散らかった用具を片付けていると、隠れるようにうずくまる佐々木の姿を見つける。
佐々木、声を殺して泣いている。
純「（驚いて）恵介！？　どうした……」
佐々木、言葉が出ない。
純、なにが起きているかわからないが、ゆっくりと佐々木を抱きしめる。
佐々木、純の胸を借り、一層涙を流す。

○同・放牧地（日替わり）
放牧地を囲んでいた緑豊かな木々は、次第に色づき、やがて葉を落とす。
巡りゆく季節のなかで、毎日変わらず営まれる、純とみらいの引き馬。
純（N）「北海道の秋はあまりに短い。今年もまた、厳しい冬がやってきた」

○同・校舎前（日替わり）
パラパラと粉雪が降っている。
フロントガラスに【札幌】と書かれた紙を貼り付けたバスが止まっている。
その前に集まる純、佐々木、工藤、紅葉、リリ。佐々木と工藤と紅葉は大きな荷物を持っている。
工藤「（純に）ほんまに自分残るんか？」
紅葉「親御さん、心配しないの？」
純「（笑って）僕はみらいのこと心配だから」
佐々木「頼んだぞ」
純「おう」
リリ「任せて」
工藤「大阪土産、期待しとき」

リリ「ごっつええもん頼んますわ」
工藤「（笑って）ほなな」
紅葉「良いお年を」
工藤と紅葉、バスの中に入る。
一人立ち止まる佐々木、純と対峙して。
佐々木「……」
純「……」
佐々木「じゃあ、行くわ」
純「うん、また」
佐々木、バスに乗り込もうとするが、
突然足を止めて、振り返る。
佐々木「（純に）すまんな」
と言って、足早に奥へと去っていく。
バスのドアが閉まり、動き出す。
純とリリ、学校から去るバスを見送る。
取り残される二人。

○ホテル海風・食堂（日替わり・夜）
十二月三十一日。
たくさんの宿泊客で賑わっている。
純、食事の提供や後片付けなど、ホテル海風の仕事を手伝っている。

○同・厨房（夜）
食べ終わった食器を持って下がる純。
貴子、料理を盛り付けながら。
貴子「純くん、本当助かるわ。匠さんと莉子には悪いけど、残ってくれて良かった」
純「なんも」
貴子「（時計を見て）もうすぐ高校行く？」
純「（時計を見て）そろそろかな」
貴子「初日の出、屋上から綺麗に見えるから。それまでには帰っておいでね」
純「わかった」
立ち去ろうとする純。
貴子「ああ、ちょっと待った」
と言って、純を呼び止める。
貴子、持ってきた魔法瓶を純に渡す。
貴子「（笑って）良いお年を」

○日高農業高校・厩舎（夜）
暗闇のなか、か細い電球が点っている。
植木、白い息を吐き、みらいの様子を見て難しい顔で深いため息をつく。
そこにやってくる純。
植木、純に気がついて。
植木「ああ、純か」
純「お疲れ様です」
植木「別に無理して来なくとも……」
リリ「やっぱりいたいた」
と言って、リリも厩舎にやってくる。
植木「！？」
リリ「（純に）よ（と、軽く手をあげる）」
純「よ（と、軽く手をあげて返す）」
植木「（目を丸くして）まったくお前たち……、今日は大晦日だぞ」
純とリリ、目をあわせて、えへへ、と頭をかくくふりをして笑う。
植木「（呆れたように、でも嬉しそう）」

○同・厩舎前（夜）
古びたベンチがいくつかあり、そこに純とリリ、そして植木が座っている。
三人は貴子から渡された味噌汁を啜る。
リリ「みらいももう一歳になるんだね」
純「競走馬はみんな一月一日に年をとる……少し変だよね。一頭一頭誕生日は違うのに」
リリ「だからセリでは、少しでも早く生まれた仔馬に人気が集まる」
純「みらいは？」
リリ「うーん。四月三日だから……」
植木「昔は平均的な時期だったんだけどな」
純とリリ、植木を見る。
植木「最近はできるだけ早く産ませようって一月・二月の出産も増えてる。（声を落とし）牝馬の発情を人為的にコントロールしてな」
純「……じゃあ……」
植木「ああ。トップ層と比べれば、生まれは出遅れてるだろうな。一馬身、二馬身、三馬身。ただそれは嘆いてもしょうがない」

リリ「（純に）大丈夫。うちの牧場にも、三月、四月に生まれた仔馬はたくさんいるから」
純「そう……だよね」
植木、不安そうな純を見て嘆息し。
植木「……お前たちには一つ、言っておかなきゃいけないことがある」
純とリリ、ハッっと植木を見る。
純「……」
リリ「……」
植木「みらいはな……競走馬としてはかなり小さい」
純とリリ、驚いて顔を見合わせる。
植木「驚くほど成長が遅いんだ」
純「そんな」
リリ「……」
植木「本来今頃は三百キロ弱になってなきゃいけないんだが、みらいは二五〇しかない。この五〇キロの差はでかい、でかすぎる」
リリ「競走馬は大きければ大きいほど強いとされる。それだけ筋肉がある証拠だから」
植木「もちろんなかには軽い馬体で活躍した競走馬もいる。だがな……セリではどうしたって見劣りしてしまう」
純「……どうして、みらいの成長が遅いんでしょうか。もしかして僕が」
植木「（遮るように）お前たちは悪くない」
純「……」
植木「俺にも理由はわからん。ただな……ある程度の覚悟は……必要かもしれない」
純とリリ、放心状態になっている。
植木「……まだみんなには言うなよ。誰よりも熱心にみらいを育てるお前たちだけの秘密だ。だから……（言葉を飲み込んで）俺たちは精一杯やるしかないな」
と言って、味噌汁を一口飲む。
植木の吐息は、この上なく白い。

○ホテル海風・屋上
防寒具を着込んだ宿泊客で賑わう。
皆、太平洋の方向を見ている。

純とリリもそのなかに立っている。
初日の出が上がる。
宿泊客から歓声が上がる。
純「……」
リリ「……」
純とリリ、素直には喜べない。

○日高農業高校・放牧地
字幕【四ヶ月後】。
放牧地の周囲に桜が咲いている。
純（N）「また、春がやってきた」
純とリリ、みらいの引き馬をしている。
純（N）「本当の誕生日を迎えるころまでには、きっと大きくなっている」
放牧地でのんびりとするみらい。
純（N）「そんな僕たちの希望的観測をよそに、みらいの成長は遅いままだった」

○同・三年馬組教室
授業を受ける三年馬組（元・二年馬組）の生徒たち。
純（N）「僕たちは三年生になった」
空席が一つ。
純（N）「ただ……恵介は今も帰ってこない」

○えりも岬・風の館展望台
純、工藤、紅葉、リリ、三波に連れられて展望台にやってきている。
三波「よく探せ、ぷかぷか浮いてるからな」
それぞれ双眼鏡を手に海を見ている。
紅葉「……あ、いた！」
紅葉の双眼鏡は、海に浮かぶゼニガタアザラシの姿を捉えている。
純「え、どこどこ」
工藤「あかん、全然見つからへん」
紅葉「かわいい……かわいすぎる」
リリ「待って、私も早く見たい」
紅葉「あ、こっちにもいる」
工藤「なんやと！」
リリ「紅葉ばっかりずるい」

三波「この襟裳岬には、約千頭のゼニガタアザラシがいるからね」
紅葉「絶滅危惧種とかじゃないんですか？」
三波「昔はね。色々保護活動をした結果、今は頭数も安定してリストから外された」
工藤「すごいやん」
三波「ただ今度は増えてきたアザラシが漁業被害を出したりしてね。サケの定置網に侵入して食べちゃったり。で今度は、アザラシの頭数を減らせっていう声も上がってる」
紅葉「ひどい」
工藤「人間っちゅうのはほんまに勝手やわ」
純「生かすも殺すも」
リリ「自分たちを神様とでも思ってるのかな」
怒りながらも双眼鏡を離さず、必死にアザラシの姿を探す四人。
純「あ」
純が双眼鏡を岩礁に向けると、陸で休むゼニガタアザラシがたくさん見えた。
工藤「なんや純」
純「（笑い声が漏れる）」
紅葉「純くんも見えた？」
リリ「純？」
純「（笑い続けている）」
工藤、紅葉、リリ、ねえ、と声をあわせて純に呼びかける。

○キャンプ場
大自然のキャンプ場。
バーベキューをする純、工藤、紅葉、リリ、三波。
焼き係の純と工藤、北海道ならではの羊肉や海鮮などを焼いている。
工藤「（焼きながら）ほんまに、恵介もおったらよかったのになあ」
純「……本当だね」
工藤「なんも知らんの？」
純「うん……」
工藤「帰ってくるやろか」
純「……帰ってくるよ」

工藤「（訝しみながらも）せやな……（焼け具合を見て）もうすぐや！」
と、紅葉とリリに呼びかける。
紙皿を片手に小走りでやってくる二人。
リリ、焼けた食材を紙皿に取りながら。
リリ「先輩たち、緊張してるかな」
工藤「そらそうやろ。自分らの馬のデビュー戦やで。えらいことや」
純「二歳新馬戦、狭き門なのにすごいよ」
紅葉「無理してないといいんだけど」
リリ「名前はたしか……」
純「アグリポップコーン」
工藤「けったいな名前や」
純「日高農業高校だからアグリ」
紅葉「ポップコーンは？」
純「馬主が好きだから」
リリ「まったく」
工藤「みらいには、ええ名前つけてもらえるといいな」
紅葉「ポップコーンは嫌」
工藤「アグリタコヤキ、アグリクシカツ、アグリ……」
紅葉「（遮って）どんな食べ物も嫌！」
リリ「謎の大阪名物しばり」
純「アグリも決まってるわけじゃないよ」
一同、笑う。

× × ×

バーベキューを食べ終えた五人。
後片付けをする三波を横目に、純たち生徒は、キャンプらしい椅子に座り、ラジオで競馬実況を聞いている。
実況（声）「新馬戦のスタート体制整った。（ゲートが開く音）飛び出しました。一番人気パグワン、後方からのスタートになりました。日高農業高校出身アグリポップコーンは二番手まずまずの走り出し」
嬉しそうな顔で互いを見る四人。

○佐々木家・恵介の部屋
散らかった部屋。

佐々木もラジオで実況を聞いている。
実況（声）「おっと前が入れ替わった。アグリポップコーン、ここでハナに立ちました」
佐々木、おっ、と驚き姿勢を正す。

○日高農業高校・教室
宮本、大野、彩、私服姿で集まり、同じくラジオから実況を聞いている。
その様子を見守る植木。
実況（声）「三、四コーナー、中間点。先頭は変わらずアグリポップコーン。生徒たちの夢を乗せて走る。このまま勝利できるのか」
祈るように聞き入る生徒たち。

○キャンプ場
椅子から立ち上がり、大興奮で応援している純、工藤、紅葉、リリ。
工藤「よし！」
純「いけ！」
紅葉「お願いお願いお願い」
リリ「勝て！」
などと、思い思いの声をあげている。
実況（声）「さあ四コーナーまわって、アグリポップコーン、その差は三馬身、圧勝か。ああっと、どうした？」
四人の動きが止まる。

○日高農業高校・教室
実況（声）「アグリポップコーン、突然の失速。故障か、故障か、故障か。なんということだ。残り百メートル」
がっくりと椅子に倒れ込む大野。
宮本、放心状態で動けない。
彩、涙が溢れ、嗚咽が漏れないように口を必死に押さえている。

○佐々木家・恵介の部屋
実況（声）「パグワンが内から来た、外からはスイートスピード、しかしパグワンだ」
佐々木の啜り泣く声が部屋に響く。

○キャンプ場
実況（声）「やはり良血強かった。一番人気パグワン新馬戦をものにした！　アグリポップコーン、残り百メートルの悲劇、生徒たちの夢も敗れたか」
涙する紅葉を抱きしめるリリ。
工藤、ラジオを流しているスマホを地面に叩きつける。
純、唇と強く噛み、空を見上げる。

○競馬場・コース
立ち上がれないアグリポップコーン。
周囲では、馬主や関係者が慌てている。
騎手、涙を流してアグリポップコーンに寄り添い、優しく馬体を撫でている。
アグリポップコーンの瞳からも涙がこぼれ、悲しそうに嘶く。

○日高農業高校・体育館（日替わり）
張り詰めた空気。
純ら三年馬組の生徒と、後輩にあたる二年馬組の生徒たちが、体育座りで並んでいる。その前に立つ植木。
植木「みんなの先輩たちが誕生を見届け、雨の日も風の日も雪の日も大切に育成したサラブレッドは、たったの一度もレースを走り切ることなく、この世を去りました」
生徒たちから啜り泣く声が漏れる。
植木「今日は特別授業をしたいと思います」
工藤「……」
紅葉「……」
リリ「……」
純「……」
体育館入り口に、佐々木が立っている。
佐々木、身長が伸びている。
植木、佐々木に気がつき。
植木「恵介、おかえり」
一斉に振り返る生徒たち。
佐々木、深く頭を下げる。

○日高地方の道
大型バスに乗っている生徒たち。
純と佐々木は隣り合って座っているが、会話は交わさない。
バスの車内には重々しい空気が流れる。
純が窓の外を見ていると、いくつもの牧場の横を通り、放牧されている何頭もの馬たちが目に飛び込んでくる。
純「……」

○肥育牧場・放牧地
少し霧が出ている。
広い草地に、馬が放牧されている。
何頭かの馬が人懐こく、生徒たちのもとにやってきて、工藤や紅葉にじゃれついている。厳しい目で見るリリ。
植木、女性職員の横山瞳(43)を連れてやってくる。
× ×
植木と瞳を囲んで立っている生徒たち。
植木「ひだ農の先輩、横山瞳さん」
瞳「よろしくお願いします」
生徒たち「よろしくお願いします」
瞳「ここにいる馬には、ある共通点があるんですけど、わかりますか？」
誰も答えようとしない。
瞳、生徒たちをあてていく。
瞳「(工藤を指して) 君」
工藤「大人の馬、でっしゃろか」
瞳「ほとんどは大人だね。(佐々木を指して) 君は？」
佐々木「サラブレッド」
瞳「(苦笑いして) 日本で生産される馬の八割が、競馬で走るため人間に作られるサラブレッドだからね。(紅葉を指して) 君は？」
紅葉「……(首を横にふる)」
瞳「(リリを指して) 君は？」
リリ「……殺される馬」
瞳「……正解」

生徒たち、息を呑む。
瞳「競馬を引退したり、そもそもセリで売れなかったりしたサラブレッドが全国各地から集められている」
純、放牧されている馬に目をやり。
純「……」
瞳「ね、みんなのびのびしてるでしょう。たくさん食べて肥えて、自由に走って……そして殺される。ここにいるのはね、肉になるサラブレッド。行き場を失った馬たちが最後に行き着く場所なの」
佐々木「……横山さんは、どうしてここで働いているんですか？」
瞳「（生徒を見回して）今の話を聞いて、サラブレッド可哀想って思った人」
と言って、挙手を促す。
生徒たちのほとんどが手をあげる。
瞳「でもね。牛も豚も鶏も、みんな人が食べるために生み出されて殺されてるんだよ」
言葉が出ない生徒たち。
瞳「それを可哀想だと思うなら、牛も豚も鶏も、馬も、作らなければいい。じゃない？（生徒を指していき）じゃない？　じゃない？　じゃない？　じゃない？」
指さされた生徒たちは、皆曖昧な反応。
瞳「でもそうしたら、牛も豚も鶏も、馬も、生まれることすらできないんだよね」
純「……」
瞳「みんなだっていつか死ぬじゃん？　でも、どうせ死ぬなら産まないで欲しかったって思う？　もし宇宙人とかにさ、どうせ死ぬんだ可哀想って言われたらどう？　必死に生きてるんですけどって、私なら思うけど」
圧倒される生徒たち。言葉が出ない。
唖然とする佐々木を見て、瞳は笑う。
瞳「だから私はここで、敬意を持って馬を育ててる。たとえ殺すためでも。人間に決められて作られた命でもさ、お前はちゃんと生きたんだよって、言いたいから。生まれてよかったって思ってもらいたいじゃんか。

……で、答えになってる？」
純「……横山さんは……サラブレッドの幸せってなんだと思いますか？」
瞳「（ふざけたように）わかったらいいんだけどねえ。（真剣に）でも……たぶんだけど……幸せって、他人が決められることじゃないから幸せなんじゃないかな。私の仕事も、騎手とか調教師とか目指すみんなから見たらたぶん幸せじゃないけど、私は幸せだって思ってるし（と微笑む）」
佐々木「……」
放牧地では、サラブレッドたちが、自由気ままに駆けている。

○日高地方の道（夕）
来た道を戻る大型バス。
行きよりも、さらに重い空気の車内。
車窓から夕陽が差し込んでいる。

○日高農業高校・放牧地（日替わり）
整列する三年馬組の生徒たち。
植木、みらいを連れてやってくる。
植木「（みらいを静止させて）みんなには今日、あることを決めてもらう。それは……みらいをセリに出すか、出さないか」
生徒たちから、え、と声が上がる。
紅葉「出さなかったらどうなるんですか？」
植木「まだわかんないけど、なんとか俺がツテを頼って、乗馬クラブとか、ホースセラピーとか、別の生き方を探そうと思ってる」
工藤「そないなこと許されるんですか？」
植木「血統的には許されないだろうね。あの超名馬ライトニングボルトの血をひくサラブレッドだ。みらいを競走馬としてみるなら、もったいなさすぎる」
工藤「ほな」
植木「ただね……もう気がついている人もいると思うけど、みらいは小さい。競走馬としては致命的なほどに小さい」
植木、純とリリに目配せをする。

純「……」
リリ「……」
植木「正直に言うと、セリに出して売れる保証はない。仮に買い手があらわれたとして、小柄なみらいがレース中に故障する確率は決して低くはないだろう。最悪の場合……」
紅葉「安楽死」
佐々木「出走することなく肉になる可能性もあるってことですか？」
植木、静かに首を縦に振る。
植木「でもそれは競走馬以外の道でも同じだ。乗馬クラブで人に怪我をさせたら、ホースセラピーの引き取り手が見つからなかったら……横山さんが言っていたとおり、今のこの国はサラブレッドが生き残るにはあまりに厳しい」
静まりかえる生徒たち。
工藤「そんなん……決められるわけあらへん」
紅葉「私はセリに出すのは反対。競馬じゃない生き方を探せるなら、絶対にそっちのほうがいいと思う。無理に走ることない！」
リリ「走るのを無理してるって、勝手に決めちゃダメだと思うよ……そもそもサラブレッドは速く走る遺伝子が組み込まれてる。走らないことがストレスかもしれない」
佐々木「乗馬もホースセラピーも……自然の生き方ではない……」
紅葉「でも長生きする確率は上がるかもしれないよ？　それに先生の知り合いなら、私たちも会いに行けるかもしれないじゃん」
工藤「せやけど、本人は虚しくならんのかな。優秀な遺伝子継いでんのに落ちこぼれて、レースにチャレンジすらさせてもらえへん」
紅葉「チャレンジしたいかどうかわからないでしょ！」
工藤「長生きしたいかどうかもわからへん！」
言い争う生徒たちのなか、無言でみらいに近づく純。
純、みらいを優しく触り。
純「なあみらい……お前はどうしたい？」

生徒たち、言い争いをやめる。
純、みんなのことを見て。
純「……ちょっと卑怯かもしれないけどさ……やっぱり、みらいに決めてもらうのはどうかな」
紅葉「はい？」
工藤「それは無理やで」
純「横山さん言ってた。幸せは他人には決められないって……だから決めてもらいたい。みらいに。みらいの未来を」
× ×
一列に並ぶ生徒たち。
そのずっと遠く。
みらい、微動だにせず立っている。
植木「本当にいいんだな？」
純「はい」
佐々木、工藤、紅葉、リリ、頷く。
植木「今から三分。みらいが走り出したら、競走馬に。止まったまま、あるいは一度でも地面に寝そべったら、競走馬以外の道」
純「お願いします」
植木「じゃあ、行くよ」
植木、ストップウォッチを掲げて、スタートボタンを押す。
工藤「確率は半々なんか、これ」
佐々木「まったく違うだろうな」
工藤「なんでや？」
リリ「引き馬のとき、どうやって歩かせた？」
工藤「どうやってって……みらいを右手で抱えて、肩をぽんぽんと叩いて……あ！」
佐々木「競走馬の基本は人の合図で走る、だ」
紅葉「じゃあ」
純「合図がなくても走り出したら、たぶん、みらいが走りたいってことじゃないかな」
紅葉「……わかった」
植木「残り二分だ」
みらい、首を下げて、草を食べ始める。
工藤「なんやあいつ、草なんか食いよって。めっちゃくつろいどるで」
リリ「腹が減ったんだろ」

工藤「状況わかっとるんかいの」
佐々木「わかってるわけないだろ」
紅葉「ああもう、ドキドキする」
リリ「どっちになっても文句はなしだよ」
植木「残り一分」
純「決めた」
佐々木、工藤、紅葉、リリ、一斉に「なにを？」と慌てて問う。
純「みらいが走ったら、僕も医者になる。走らなかったら医者にはならない」
リリ、笑う。
工藤「純、せこくないか。みらいが走らなさそうやからって」
純「（首を強く横に振り）そうじゃない。この勝負、みらいの選択肢を決めたのは僕だ。みらいの選択に、僕は僕の未来を託したい」
植木「残り三十秒」
リリ「じゃあ、私も」
工藤「は？」
リリ「みらいが走ったら、牧場を継ぐ」
工藤「なんやお前ら」
植木「二十秒」
紅葉「（嬉しそうに）ねえ、走らなさそうだよ！」
佐々木「いや……きっと駆け出す」
植木「十秒、九、八」
みらい、急に草を食べるのをやめて、首を上げあたりを見回す。
工藤「なんや！」
紅葉「うそ」
植木「七、六、五」
佐々木「（目を見開いて）……」
植木「四」
紅葉「（祈るように手を合わせ）……」
植木「三」
工藤「（口を大きく開けて）……」
植木「二」
リリ「（目を瞑り）……」
植木「一」
純「（微笑んで）……」
みらい、駆け出す。

ストップウォッチのアラームが鳴る。
生徒たちの視線の先、みらいは自由に、
気持ちよさそうに走り回っている。
純「（笑顔で）走った」
リリ「（呆然として）走ったね」
工藤「走っとる」
紅葉「走っちゃった」
佐々木「走ってる」
植木「決まりだな」
生徒たち、呆気に取られて静かになる。
紅葉「わかったよ！　みらい！　走れ！」
佐々木「走れ！」
工藤「走れ！」
リリ「走れ！」
純「走れええええええええ！」
生徒たちの歓声を受けて、みらいは、
いつまでも走り続けた。

○同・進路指導室（日替わり）
純と植木、向かい合い座っている。
植木、純の成績表を見ながら。
植木「純は成績優秀だから、なにも心配ない
んだが……あの話、本当に決めたのか？」
純「あの話、ですか？」
植木「ほら。医者になるって話」
純「（笑って）決めました」
植木「いいのか？」
純「医者になること自体が嫌だったわけでは
ありません。吃音で人と話すのが怖かった
のと、生まれた瞬間から決まっている人生
を生きるのが嫌だっただけですから。命を
助ける医者の仕事に、今は憧れています」
植木「（笑って）そうか」
純「それにもう生まれた瞬間から決められて
いた人生じゃなくなりましたから、医者は」
植木「……というと？」
純「みらいと二人で選んだ人生ですから」
と、誇らしげに笑う。

○同・廊下

進路指導室から出てきた純。
佐々木、次の順番で待っている。
互いに気がつく。
佐々木「おう……純だったのか」
純「お待たせ」
佐々木、進路指導室に入ろうとして。
佐々木「ちょっと待っててくれない？」
純「（不思議そうに）いいけど？」
佐々木「（笑って）一緒に帰ろうぜ」
と言って、部屋の中に入っていく。
純、つられて笑う。

○新河町・道路（夕）
夕暮れの美しい田舎道。
田んぼが広がり、牧場が連なり、馬産地の生活が垣間見える。
自転車で走る、純、佐々木、工藤。
工藤「函館行ったとき、思い出すなあ」
純「工藤が遅刻したときね！」
佐々木「もう一年経つんだな」
三人はすっきり晴れた笑顔で楽しそう。

○ホテル海風・大浴場（夜）
こぢんまりとした露天風呂。
遠くに波の音が聞こえる。
純、佐々木、工藤、湯に浸かっている。
佐々木「……二人に話したいことがあってさ」
工藤「なんや、彼女できたんか。誰や」
純「……」
佐々木「……俺、騎手にはなれなかった」
工藤「（驚いて）……」
純「（知ってたという顔で）……」
佐々木「騎手になるにはさ、厳しい体重制限があって、どれだけ重くても四十キロ台じゃないといけなくて」
工藤「四十！？　軽すぎや」
佐々木「あんまり気づいてないかもしれないけど、俺、去年の夏くらいから急に背伸びちゃって、もう四十キロ台は無理になって」
純「ガリガリの騎手ってわけにはいかないも

んね」
佐々木「（頷いて）なんか、みらいとは逆だなあって思って。あいつは小さすぎる、俺は大きすぎる。ずっと背が低いことコンプレックスで生きてきて、ようやく見つけた小さくてもかっこいい仕事だったのに……だから……もう騎手にはなれないんだわ」
工藤「（気落ちしたように）……そんなことってあるかいな」
佐々木「あるんだな、それが」
純「それで？」
佐々木「ん？」
純「（からかうように笑って）次の夢見つけたから、戻ってきたんでしょ？　ひだ農に」
工藤「そうなんか？」
佐々木「（笑って）敵わないなあ、純には。ほんの一年前まで、あんなに人見知りで引っ込み思案で無口で根暗な陰キャだったのに」
工藤「恵介、言い過ぎちゃうか」
純「（笑って）自分でもそう思うから」
工藤「ほうか？」
佐々木「……アグリポップコーンが故障して安楽死させられたときに思った。速いだけじゃない、強くて丈夫で長生きできる馬を育てたいって。そしてそれはきっと……騎手になれなくてもできる」
純「……」
工藤「……」
佐々木「だから今は調教師を目指してる。競走馬をトレーニングして、一頭でも多く、レースを走りきれるように。それに……」
と言って、工藤のことをみる。
工藤「なんや」
佐々木「（ニヤッと笑い）俺が鍛えた競走馬で、工藤を勝たせてやるよ」
工藤「（吹き出して）言うたからなあ！」
純、微笑む。

○日高農業高校・三年馬組教室
着席する生徒たち。

植木、前に立っている。
植木「セリの引き手に求められるのは、引き馬の技術、それと……みらいとの信頼関係。例年はこの一年半の様子を見て俺が決めているが、今年もそれでいいかな？」
生徒たち、頷く。
植木「よし。セリの引き馬は２回。まずは本番直前、広場でのアピールタイムだが……」
純「……」
リリ「……」
工藤「……」
紅葉「……」
植木「恵介、頼んだぞ」
佐々木「（驚いて）え？　俺？」
生徒たちも唖然としている。
リリ、笑って拍手をし始める。
すると、ほかの生徒たちも拍手をする。
佐々木「……俺はリリなんだとばっかり」
リリ「忘れたの？　私は牧場主の娘」
植木「リリはな、室戸牧場の引き手として参加するから、今回はいわば……ライバルだ」
リリ「違います、味方です、味方」
と笑って、佐々木のほうを見る。
佐々木、リリの微笑みから、引き手を譲るためだと気づく。
佐々木「……ありがとう」
佐々木、頭を深く下げる。
リリ「ちゃんとアピールしてね」
植木「それにな、恵介が引くメリットがある」
佐々木「メリット？」
植木「身長だ、身長。小柄な恵介が引けば、みらいは相対的に少し大きく見える」
佐々木「小柄な俺だから……」
植木「頼んだぞ」
佐々木、強く頷く。
植木「んで本番だ。慣れない環境で多くの買い手の目に晒されて馬の緊張はピークだ。逃げ出したい、暴れたい、それを落ち着かせる。大切なのは、引き手への信頼。この人がいるから大丈夫、この人がいるから安

心だ。みらいが一番信頼できる生徒、俺は……純だと思う」
純、嬉しそうに涙を滲ませながら笑う。
生徒たち、一斉に拍手。
植木「名付け親でもあるしな」
純「（震えた声で）頑張ります」
と頭を下げる。

○同・放牧地（日替わり）
みらいの引き馬を練習する純と佐々木。
指導する植木。
純（N）「こうして、僕と恵介とみらいの、特訓が始まった」
見守る工藤、紅葉、リリ。
純（N）「工藤、紅葉、リリの三人も、帰省はしなかった」

○同・馬房
みらいに餌を食べさせる純。
佐々木、工藤、紅葉、リリ、見ている。
純（N）「誰も口にしなかったけど、みんなわかっていたんだと思う」

○同・厩舎前
みらいの身体を洗う純、佐々木、工藤、紅葉、リリ。楽しそう。
純（N）「これが、みらいと過ごす最後の時間だということを」

○セリ会場・広場
そこかしこに出品される馬と生産者、
そして買い手が散らばっている。
佐々木、みらいの引き綱を手に立ち、
緊張している。
その周囲に広がる、純ら生徒たち。
工藤「（ほかの馬を見て）うわあ、でっか」
紅葉「（別の馬を見て）毛並み、綺麗」
佐々木「お前たち……」
工藤「（ハッとして）すまんすまん。いやあ、ほんまにぎょうさん名馬がおるわ」

純「競馬好きの血が騒ぐ？」
工藤「今からツバつけとかんといかんわ」
純「（ふざけて）大将、こちらの馬なんかどう
でっしゃろ、みらい言うんですけど」
工藤「（調子をあわせて）あら、ええ馬ですね。
おいくらでっしゃろ」
純「二百万からですわ」
工藤「ほな、二千万出したろ！」
佐々木「……歴代最高額じゃねえか……」
リリ、やってくる。
リリ「（佐々木に）緊張してんなあ」
紅葉「リリ！」
リリ「（手を挙げて）よ！」
佐々木「緊張なんかしてねえよ」
リリ、佐々木の肩を強く叩く。
佐々木「なにすんだよ」
リリ「緊張はみらいにも伝わるぞ」
佐々木、みらいをみて。
佐々木「……すまん」
純「もう終わったの？」
リリ「あと二頭かな」
工藤「おいくら万円でした？」
リリ「……（笑って誤魔化す）」
工藤「えらいこっちゃ」
リリ、みらいに近づいて触り。
リリ「みらい、頑張れよ。ちゃーんと、売れ
てこいよ」
リリを倣って、工藤、紅葉もみらいに
触る。
工藤「いくらでもええ。気にすんな」
紅葉「大丈夫、みらいはかわいいから」
純、スマホを取り出して。
純「写真、撮っとく？」
紅葉「今？」
純「セリで買い手がついたらさ……もう僕ら
の馬じゃなくなっちゃうし」
佐々木、工藤、紅葉、リリ、口にしな
かった現実を突きつけられ言葉を失い
つつも、次第に笑顔になっていく。
工藤「せやな」

リリ「撮ろう撮ろう」
紅葉「自撮り？　頼む？」
佐々木「自撮りにしよう」
純、スマホを高々と構えて。
純「じゃあ、いくよ。はい、チーズ」
純、シャッターを押す。
×　×
広場の中央、円形のコースが用意されていて、そこで引き馬が行われている。
佐々木とみらい、順番を待っている。
佐々木「よし、行くぞ！」
佐々木、みらいの右肩を叩く。
純「（みらいの尻を押して）行ってこい！」
コースへと出ていく佐々木とみらい。
佐々木、異様なほどに心音が高鳴り、緊張から俯いてしまっている。
佐々木「（小声で）大丈夫……大丈夫……大丈夫……大丈夫……大丈夫」
紅葉「恵介くん！」
佐々木、ハッと目をあげる。
そこに、純、工藤、紅葉、リリ、植木の姿がある。
佐々木、微笑む。
みらいも喜んでいるように見える。
佐々木、落ち着きを取り戻し、堂々と、そして正確な引き馬を披露する。
工藤「やりおるな、あいつ」
紅葉「まさか工藤くん、疑ってたの？」
工藤「ちゃうちゃう」
植木「しかし……あの身長で大したもんだ」
工藤「え？」
植木「当たり前だろ。みらいは小さいといっても競走馬、あんなに大きいんだ。小柄な人間が引くのはどれほど大変か」
純「僕の身長でも持っていかれそうになる」
工藤「でも先生、小柄だからいいって……」
植木「それはそう。でもリスクもある。俺は恵介に賭けたんだが……これは勝ったかな」
リリ「私だって恵介に賭けました」
佐々木とみらい、無事引き馬を終える。

○セリ会場・メイン施設
戸惑いながらやってきて、並んで座る
佐々木、工藤、紅葉、リリ。
紅葉「（圧倒されて）すごい雰囲気」
工藤「あかん、緊張してきた」
佐々木「いよいよだね」
リリ「……」
リリ、会場の出入り口に目をやる。
× × ×
会場のすぐ外。
純、みらいとともに待っている。
みらいの毛並みを触る純。
× × ×
フラッシュバック。
一年半前。
母馬から生まれ落ちるみらい。
涙する純。
× × ×
フラッシュバック。
引き馬を教える植木。
純、恐る恐る挑戦してみる。
× × ×
フラッシュバック。
植木「三、二、一」
走り出す、みらい。
生徒たち「走れ！」
× × ×
みらいの身体を洗う生徒たち。
みらい、嬉しそうに嘶く。
× × ×
純「みらい……行こうか」
と言って、歩き始める。
× × ×
会場に入ってくる純とみらい。
アナウンス「さあ今年も日高農業高校の生産馬がやってきました。あのライトニングブラウンの血を引く牡馬」
純、みらいを落ち着いて立たせる。
アナウンス「二百万円からです。二百万、二

百万、二百万、二百万」
席に座っている佐々木、工藤、紅葉、リリ、祈るように見つめている。
アナウンス「二百万、二百万、二百万、二百万。いらっしゃいませんか？」
紅葉「うそ」
工藤「なんでや」
佐々木「頼む」
リリ「（手を合わせて祈りながら）お願いしますお願いしますお願いします」
純、会場の喧騒はまったく聞こえず、高鳴る心音とみらいの吐息だけが響く。
みらいと純の目があった。
純とみらい、見つめあう。
純「（小声で）みらい。大丈夫。お前はもう、立派なサラブレッドだ」
その言葉に答えるように、みらいは姿勢を正し、凛々しい立ち姿を見せる。
リリ「かっこいい」
紅葉「綺麗」
工藤「名馬や、名馬」
佐々木「みらい」
アナウンス「二百万、二百万、二百万」
客（声）「えい！」
純、その声に反応して客席を見る。
最前列の客が手を挙げている。
生徒たち、身を浮かせ、思い思いの姿勢で喜びを表現している。
アナウンス「最前列の方、二百万。ファーストビットありがとうございます」
生徒たち、歓声をあげる。
アナウンス「二五〇万、二五〇万……」
純、微笑んで、みらいの肌を触る。
みらい、純に触られるのが嬉しそうだ。
みらい「（嬉しそうに嘶く）」

○競馬場・客席
字幕【一年後】
多くの競馬ファンが詰めかけている。
純（18）、出入り口に立ち、感慨深い。

純「……」
工藤(18)、後ろから純に飛びかかる。
工藤「久しぶりやのお、純」
純「(笑って)工藤、相変わらずだな」
工藤、純から離れる。
佐々木(18)、工藤の横に立っていて。
佐々木「元気そうだな」
純「恵介も」
工藤「みんな、もう来てるで」
と言って、客席を指さす。
紅葉(18)とリリ(18)、手を振っている。
× × ×
客席に座る純、佐々木、工藤。
紅葉「純くん、大人びたね」
リリ「背伸びたんじゃない？」
純、照れる。
工藤「医学部さまやからな」
佐々木「あ、そうだね、おめでとう」
紅葉「そうだよ、お祝い会してないじゃん」
純「いいよ。みんなも忙しいだろうし」
工藤「全然暇やな」
リリ「うん」
佐々木「じゃあ、みらいの初レース祝賀会の、ついで、にやろう」
純「(笑って)恵介、違うだろ」
佐々木「なんだ、ついでは不満か？」
純「(首を振って)初勝利祝賀会じゃないの？」
工藤「(笑って)言うやないか」
リリ「そうね」
佐々木「いや俺だってそう思ってるよ、思ってる、同じ気持ち！」
紅葉「でも大丈夫かしら。もし……」
純「(遮るように)大丈夫。みらいなら大丈夫」
コースに出場馬が出てくる。
純「(みらいに気がつき)お！　出てきた」
工藤「本当や」
紅葉「(大声で)みらい！」
佐々木「(手を振って)みらい！」
リリ「ちゃんと大きくなってるじゃない」
純「(誰よりも大きな声で)みらい！」

そのとき。みらいが客席に目を向ける。
純とみらい、目があっている。
会場にファンファーレが鳴る。
×　×　×
スターティングゲートに向かう競走馬。
実況（声）「札幌競馬場。芝、一八〇〇メートル、二歳新馬戦。未来の名馬は生まれるか。
大注目のレースです」
スターティングゲートに入る、みらい。
×　×　×
工藤、立ち上がり声援を送っている。
紅葉、拍手をしている。
佐々木、双眼鏡を覗いている。
リリ、手をあわせて祈っている。
純、拳を握りしめ、笑っている。
実況（声）「初勝利を目指して二歳の若駒が集いました。各馬おさまって……」
ピストルが鳴る。

○暗転
駆け出すサラブレッドたちの足音。
実況（声）「今スタートしました」

了

【参考文献】

○書籍（著者名五十音順）

・アーネスト・ヘミングウェイ、『移動祝祭日』、新潮社、２００９年。

・岩崎徹、『馬産地８０話：日高から見た日本競馬』、北海道出版会、２００５年

・亀谷敬正、『勝ち馬がわかる：血統の教科書２．０』、株式会社池田書店、２０２３年。

・楠瀬良、『サラブレッドに「心」はあるか』、中央公論新社、２０１８年。

・シャムロック乗馬クラブ、『乗馬初心者さんのためのこんなときどうしたら？Ｑ＆Ａ』、つちや書店、２０２２年。

・関口隆哉・宮崎聡史、『競馬の〝言葉力〟』、ＫＡＤＯＫＡＷＡ、２０２０年。

・辻谷秋人、『馬はなぜ走るのか：やさしいサラブレッド学』、三賢社、２０１６年。

・寺山修司、『馬敗れて草原あり』、ＫＡＤＯＫＡＷＡ、１９７９年。

・平林健一、『サラブレッドはどこへ行くのか：「引退馬」から見る日本競馬』、ＮＨＫ出版新書、２０２４年。

○サイト（著者名五十音順）

・小林万里、「特集：深刻化するゼニガタアザラシの漁業被害～どう管理すべきかを考える～」、海の環境ＮＰＯ法人ＯＷＳ。
https://www.ows-npo.org/media/backno/tokushu63forWeb.pdf
（最終参照：２０２５年８月４日）

・頃末憲治、「５やさしい育成技術：子馬の管理方法〜初期育成期の取り扱い〜」、育成調教技術の改善・普及：ＢＴＣニュース第８０号、２０１０年７月。
https://www.b-t-c.or.jp/img/pdf/btcn80/btcn080-05.pdf
（最終参照：２０２５年８月４日）

・静内農業高校ホームページ。
http://www.shizunainougyou.hokkaido-c.ed.jp
（最終参照：２０２５年８月４日）

・ＪＲＡ公式ホームページ。
https://www.jra.go.jp
（最終参照：２０２５年８月４日）

・ＪＲＡ、「離乳までの子馬の栄養管理」、馬の資料室、２０１４年６月。
https://blog.jra.jp/shiryoushitsu/2019/09/post-5a4c.html
（最終参照：２０２５年８月４日）

・ＪＲＡ、「引き馬ー子馬から競走馬まで」、馬の資料室、２０１５年８月。
https://blog.jra.jp/shiryoushitsu/2019/12/post-070a.html
（最終参照：２０２５年８月４日）

・ＪＲＡレーシングビュアー、「未来に語り継ぎたい名馬」。
https://prc.jp/jraracingviewer/contents/yushun/
（最終参照：２０２５年８月４日）

・農林水産省、「特集：はばたけ！農業高校生」、ａｆｆ７月号、２０２３年７月。
https://www.maff.go.jp/j/pr/aff/2307/spe1_01.html
（最終参照：２０２５年８月４日）

・北海道農政部競馬事業室、「軽種馬の生産～出走まで の流れ」、平成３０年度第１回北海道地方競馬運営委員会（参考資料３）、２０１８年８月。
https://www.pref.hokkaido.lg.jp/fs/4/7/8/0/6/7/5/_/H30-01uneiiinkaisankousiryou3.pdf
（最終参照：２０２５年８月４日）

・ＢＯＫＵＪＯＢブログ、「当歳馬の馬体検査【ダーレー・ジャパン・ファーム】」、２０１５年６月。
https://bokujob.com/blog/article/2015/post-251.html#:~:text=出生時の体重は,にまで成長します%E3%80%82
（最終参照：２０２５年８月４日）

・三浦久延、「サラブレッドの成長」、軽種馬経営専門家・研修情報提供サイト、２０２４年６月。
https://jbba.jp/data/experttraining/searchDetail.php?sbt=0&value=84
（最終参照：２０２５年８月４日）

・吉沢一美、「ゼニガタアザラシと漁業」、アクテイブ・レンジャー日記【北海道地区】、２０２４年１０月。
https://hokkaido.env.go.jp/blog/page_00436.html
（最終参照：２０２５年８月４日）

○映像
・平林健一監督『今日もどこかで馬は生まれる』、Creem Pan、２０１９年。
https://www.amazon.co.jp/今日もどこかで馬は生まれる-荒木貴宏/dp/B0918X169W
（最終参照：２０２５年８月４日，Amazon Prime Video）